

# タロウのひまわり

光野 朝風

## タロウのひまわり 1

---

公園を薄汚い野良犬が歩いていました。

野良犬の毛は汚れ、ぼさぼさで、まるで泥の中を転がってきたようでした。

男の子が野良犬を見つけて近寄ろうとすると、お母さんが駆け寄ってきて、「やめなさい！噛まれたりしたらどうするの！こんな汚い犬」と言って、男の子を遠ざけました。

野良犬は冷ややかな目で親子を一瞬見て、何も興味がわかないかのように歩き去りました。

野良犬にはタロウと言う名前がありました。

タロウは小さな頃に大きな女性がそう言っていたのを覚えていました。

タロウは女性の家で、母親と楽しい日々を過ごしていました。

ある日のこと、小さなタロウは女性に抱きかかえられながら、どんどん見知らぬ場所へ連れて行かれ、不安になりました。

「ごめんね。タロウ。誰も引き取ってくれないから、こうするしかないの。子供はもう家じゃ育てられないから。生きてね、タロウ。ごめんね。ごめんね。ごめんね」

女性は何度も謝りながら、タロウをダンボールの箱の中に入れて去っていきました。

小さなタロウはどうしていいかわかりませんでした。

ゴミ捨て場に置き去りにされたタロウは、ぼんやりしながら周りを見回しました。

「誰かきつと迎えに来る。お母さんはどこだろう。僕一人じゃとっても寂しいな」

でも、誰も迎えに来ませんでした。

タロウはとても悲しくなりました。

ゴミ捨て場には色々な人が来ますが、誰一人タロウを連れて行こうとしません。

ひとりぼっちで寂しそうに道行く人を眺めるタロウのもとに、手をつないだ親子連れが来ました。

「ママー。この犬おうちに連れて帰ろうよ。かわいそうだよ」

「ダメよ。うちのマンションはペット禁止でしょ。うちじゃ飼えないの。お願い。わかって」

少女とママはそう話しながら帰っていきます。

時々、優しい少女がお菓子を持ってきて食べさせてくれますが、それではおなかがいっぱいにはなりません。

時々、大きな車から男の人が降りてきて、タロウを見てため息をつきます。

「まったく、こいつまだいたのか。保健所に持って行ってもらうか」

時々ゴミを集めに来る男の人がそう言いました。保健所ってなんだろうとタロウは思いましたが、小さなタロウは行き場もなく、どこか行くところがあるならそこでもいいやと思いました。

次の日、優しい少女がお菓子をたくさん持ってきて言いました。

「わんちゃん、逃げて。わんちゃん保健所に連れて行かれるんだよ。殺されちゃうんだよ。私わんちゃんに死んで欲しくないから。逃げて」

タロウはお菓子をおなかがいっぱいになるまで食べて、殺されるくらいなら逃げようと思いましたが。

(どこに行けばいいのだろう)

逃げるといっても、タロウにはあてがありません。

トボトボと歩いているうちに日も暮れてきます。

足も疲れて、だんだん動かなくなります。

タロウは路地裏の隅でうずくまって寝ることにしました。

(ここはどこだろう)

空を見上げると、大きなお月様が浮かんでいました。それを見ていると、なんだかお母さんのことを思い出します。

一緒に暮らしていたころは、お母さんは一生懸命タロウのことを優しく包んでくれていました。

(またお母さんに会えるのかな)

タロウは夢でもお母さんに会えたらよいなと思い、「おやすみなさい」と言って眠りにつきます。

その時、タロウの「おやすみなさい」を聞いていたものがありました。

土の中のひまわりの種です。

土の中のひまわりの種は、そっとタロウへと「おやすみなさい」と言いました。

その種の小さな声にタロウは気がつくはずありません。

タロウがある日公園へと行くと、子供たちが遊んでいました。

子供たちはタロウを見つけると、駆け寄ってきます。

「なんだこの犬汚いなあ」

「なあ、なんか新しい遊びないの？」

「そうだ。こいつに石一番多くあてたやつが勝ちってのどうだ」

「いいね、動く的だ」

タロウは嫌な予感がして、逃げようと思いました。

「おい！逃げるぞ！早く投げろ！」

タロウは必死に逃げました。後ろから石が飛んできます。そのうちの四つくらいが体に当たってタロウの体からは血が出てしまいました。

その後も、出会う人、出会う人、すべてが「汚い」と言ってタロウを嫌な目で見ます。

タロウは思いました。

(僕はどこへ行っても嫌われるんだ)

タロウが行く先、人に出会えばタロウは追い払われました。

タロウは人からうとまれ、だんだんと人を憎むようになりました。

そして、時間とともにすっかり野良犬として生きていく術も身につけていきました。

ある日タロウは畑の中で食べられそうなものを探していました。

すると頭の上から声がします。

「どちらへ行くのですか？」

見上げると、太陽の光がまぶしくて、よく見えませんでした。

「あ？誰だよ！お前は！」

その頃になると、タロウの言葉もだいぶ悪くなっていました。

よく見ると、大きな太陽のような花が話しかけてきていました。

「私はひまわりですよ。ずっとあなたがここへ来た時から知っています」

タロウは喧嘩腰で怒鳴ります。

「お前なんて知らねえよ！」

## タロウのひまわり 2

---

ひまわりは怒鳴り声にもにっこりとしながら答えます。

「それはそうでしょう。あなたと最初に出会った頃は、まだ私も土の中にいて芽を出そうとする前でした。今はこうして太陽と同じように花を咲かせていますから、わからないのも無理はないですね」

ひまわりは輝くような笑顔で、タロウへと話しかけてきます。

タロウはとても不機嫌になりました。

幸せそうに笑っているひまわりを見てみると、自分が人を恨んだり、みじめな生活をしていたりするのとは比べてしまって、ひまわりを腹立たしく思いました。

(どうしてこいつはこんなにも嬉しそうなんだ。俺を馬鹿にしているのか)

「憎しみはあなたを孤独にします。どうして憎むのですか？」

ひまわりはタロウの気持ちを知っているように言ってきます。

タロウは自分が哀れまれ、見下されていると思い、とたんにむっとして怒鳴りました。

「うるせえ！お前なんか俺の気持ちがわかるか！」

タロウはひまわりを見上げにらみつけますが、時折太陽の光がまぶしくてうまく見つめられません。

「くそっ！まぶしすぎる」

ひまわりはタロウを葉っぱで優しく抱きしめます。

「私は太陽さんの力を受けて、笑顔でいられるのです。生きているもの全てが、あたたかな気持ちでいられるように笑っているのです。どんな生き物にも、きちんと笑いかけます」

「うるせえ！俺に笑いかけるな！不愉快なんだよ！」

「どうしてあなたにだけ笑いかけるのをやめなければいけないのでしょうか。あなたを区別して扱うことは私にはできません」

「やめろ！同情なんていらぬぞ！離せ！俺にかまうんじゃねえ！」

タロウはひまわりの優しさに心から苛立ちを覚え、走り逃げました。

タロウの心にはどうしてか、寂しい気持ちが深くなりました。

どうして寂しい気持ちが生まれたのか、どうしてその奥にチクチクと痛む気持ちがあるのか、タロウにはわかりませんでした。

(俺は一人なんだ。あいつは俺を馬鹿にしていたに違いない。きっとそうだ。みんなと同じなんだ。あいつは俺をいじめようとしていたんだ。そうやって心のどこかで馬鹿にするのを楽しんでいるんだ)

タロウはひまわりを疑って、少しも信用できませんでした。どうしてか考えれば考えるほど、疑えば疑うほど、腹立たしくなって、余計にひまわりを恨みました。

(どうしてあんなことするんだ・・・)

タロウはその夜、久しぶりに夜空を見上げました。

夜空には雲ひとつなく、綺麗で大きなまんまるお月さまが浮かんでいました。

昔はよく母親のぬくもりのように、月の光を思っていたのに、今はまともに見ることができずに、お月さまから目をそらしてしまいます。

(謝らねえからな。あのひまわりが悪いんだからな・・・)

タロウがある朝とぼとぼと公園を歩いていると男の子が近寄ってきました。

するとすぐに男の子の後ろのほうからお母さんが駆け寄ってきて、「やめなさい！ 噛まれたりしたらどうするの！ こんな汚い犬」と言って、男の子を遠ざけました。

(そらみろ・・・みんな俺のことを嫌ってるんだ。馬鹿にするんだ・・・みんな俺のことなんていなくなればいいと思っているんだ)

タロウはのどが渇き、近くの池で水を飲もうとしました。公園には、時々人間に連れられた犬が気取った顔で歩いていたたり、甘えた顔で歩いていたたり、幸せそうな顔をして歩いていたたりしました。

犬を連れている人間は、犬へと優しくほほえんだり、なでたり、抱き上げたりしていました。

タロウはそれを見るたびに喧嘩を売りたくなりました。

(みんな幸せそうにしゃがって、許せない)

タロウがムカムカしながら池の水を飲んでしていると、どこからかバイオリンの音がしてきました。

(なんだ？ この音は・・・)

タロウが顔を上げて、音の聞こえるほうへと歩いていくと、公園の椅子に老女が座っていました。

老女はバイオリンを弾きながら、何か懐かしいものにでも浸っているかのような顔で池を見つめています。

タロウが老女の視線の先を見ると、キラキラと太陽の光に輝いた水が見えます。でもそれだけです。

(なんだ？ このばあさん池を見るのが楽しいのか？)

タロウは自分が月を見て母親のことを思っていた気持ちをすっかり忘れ、心を思いやる気持ちがなくなっていました。

老女がバイオリンを弾き終わると、タロウに気がつきました。

「お前はひとりぼっちかい？ ずいぶん痩せてしまって・・・おなかがすいているのかい？ これは私のお昼ご飯だけど食べるかい？」

優しい声でタロウへと声をかける老女の手にはおにぎりがありました。

とてもおいしそうなおいがします。

タロウはとても警戒しましたが、空腹にはかないませんでした。

おにぎりを我慢しようとするほどおなかがなって、よだれが出てきます。

ついに老女のおにぎりを口にしてみました。中にすっぱいものが含まれています。それがますますタロウの食欲をさそいました。

タロウがガツガツとおにぎりを食べている姿を見て老女はほほえみます。

「そうかいそうかい。そんなにおなかがすいていたのかい。もうここにはないけど家にはまだあるよ。来るかい？」

タロウはどうしても深く人間を信用することができませんでした。

タロウは老女の家についていくのはやめようと思いました。

警戒心の取れないタロウは老女をにらみつけたまま動きませんでした。

老女は少しだけ寂しそうな目をしながら言いました。

「お前は、よっぽどひどい目にあってきたんだね。明日も来るからここで待っていなよ」

そう言って老女は家へと帰っていきました。

### タロウのひまわり 3

---

次の日、タロウは老女を疑いながら同じところで待っていると、老女は大きめのかごと、バイオリンを持ってきました。

老女は椅子に座り、池を見ながらバイオリンを弾き始めます。

タロウはその音を聞いていると、とてもあたたかな気持ちに包まれてきます。

まるで優しい思い出がたくさんつまっているかのような、やわらかで、時折切なさの混じる音色でした。

タロウはその音を聞きながら老女のそばに座るのが大好きになりました。

老女がバイオリンを弾き終わると、大き目のかごから、おにぎりの他にも、卵焼きや、ソーセージや、果物が出てきました。

「お前はたんとお食べ。おなかですいているだろうからね」

そう言って老女はタロウに自分よりもはるかに多い食べ物を分けてくれました。

タロウは驚きながらも、出されたものをバクバクと食べます。

(うめえ！こんなうめえもの食べたことねえ！)

タロウの感激は言うまでもありません。でもタロウには老女がどうしてこんなに優しくしてくれるのかわかりません。

老女はタロウが食べ終わったのを見てとても嬉しそうに微笑んでいます。太陽の光が当たってまぶしいくらいでした。

その時、タロウの記憶にひまわりが浮かびました。老女の自然な微笑みがひまわりの微笑みと重なったのです。

タロウは複雑な気持ちになって、その場にいられなくなりました。

もしかしたら、自分はひまわりにひどいことをしてしまったのかもしれない、ちらりと、そう思ったのです。

しかしタロウは素直に自分が間違っていたと認められませんでした。

(ふんっ！あいつが悪いんだ。俺のことなんにも知らないでよ。不愉快なやつだったぜ)

タロウは心の中になにかつかかかったような気持ちを覚えながら老女のもとから去ろうとすると、声がしました。

「また来るからね。いつでもお前のことを待っているよ」

老女はタロウの背中に向かって、そう言いました。

次の日は雨でした。

タロウはひどい雨にうたれながら、「来るはずないだろ。こんな雨の中」と、雨を見上げながら独り言を言いました。

しかしタロウは待ち合わせの場所になんとか来てしまいました。

見渡しても、やはり誰もいません。

(来るはずないよな)

タロウはそう思いました。

すると、赤い傘をさして、この雨の中老女はやってきたのです。

手には大きなかごを持っていました。

いつもの椅子のところへ来ると、タロウに言いました。

「今日は雨だし、傘をさしながらバイオリンを弾くことはできないから、バイオリンはお休み

だよ。でも、ちゃんとお前のご飯は持ってきたからね。たんとお食べ」

老女はタロウに傘をさしてくれて、食べ物を食べさせてくれました。

タロウが食べているとき、本当に嬉しそうに微笑んでいます。

タロウは思いました。

(あのひまわりも、雨の中こうやって色んなものに微笑んでいるのかな)

老女はそれから、毎日欠かさずやってきました。

タロウはだんだん老女に感謝するようになりまし。そして無償の微笑みがなぜ向けられるのか、どこかわかるような気がしました。

それは、ただ相手の幸せを願い、相手の幸せを得て自分の幸せにしているのだと、老女の毎日の行いを見て思うようになりまし。

ある晴れの日、バイオリンを弾きながら老女はいつもの通り、輝く水面を見ていました。優しい音色に包まれながら、きつこのふんわりした気持ちは、母親に包まれている気持ちなのだとタロウは思っていました。

バイオリンを弾き終わってから老女は言いました。

「このバイオリンはね、私が生涯愛した人が聞いてくれたバイオリンなんだよ。あの人は生涯私と、私の曲と、このバイオリンの音色を愛してくれた。その人はね、生涯結婚することはなかった。でも、私はそれでもよかった。あの人といつも繋がっている気がしていた。その気持ちは嘘じゃなかったと今でも思っているんだよ。だから私は死ぬまであの人を想いながらバイオリンを弾くんだよ」

タロウには老女の気持ちがどれほどのものか、わかることはできませんでした。しかし、タロウは老女になにかあったときは、自分が守ってやる、と思っていました。

もうタロウにとって、老女はかけがえのない大切なものになっていたのです。

しかし、ある日老女はぱったりと池に来ることがなくなっていました。

タロウは以前、匂いを辿って、老女の家の前まで行ったことがありました。タロウは心配で老女の家まで行くと、老女の家には救急車が止まって、人だかりができていました。

「孤独死みたいよ」

「あらかわいそうね。身寄りのないおばあさんだったの？」

「まあ・・・ああはなりたくないわねえ」

「うちは大丈夫よ。子供が四人もいるんですもの」

「でも、悲惨よねえ・・・死体何日も見つけられないんでしょう？」

人間同士の他人行儀で残酷な会話がタロウにも聞こえてきます。

(し、死んじゃったのか・・・どうして・・・あんなに優しい人がどうして・・・俺は、なにもしないまま、ありがとも表せないまま、なににも伝えられないまま、死んでしまったのか・・・ひどいよ・・・俺はどうしていけばいいんだ・・・)

タロウの胸は悲しみに張り裂けそうでした。

タロウはいつもの池に行って、泣き叫びました。

「ワーン・・・ワーン・・・ワーン・・・」

何度も遠吠えのように声を出して泣き叫びます。老女がどれだけ愛情を持って接してくれたかは、さすがのタロウでもわかりまし。老女が毎日お弁当を作ってくれたこと、毎日のようにバイオリンを聞かせてくれたこと、毎日ほほえんでくれたこと、そう、太陽のように微笑んでくれたこと。その微笑みがどれほど救いになったことか、どれほど安らぎになったことか、なにをしても届かないほど、大きな大きな愛情をもらったこと。

## タロウのひまわり 4

---

その時、タロウはひまわりのことを思い出しました。

(そうだ。ひまわりにあの時のことを謝ろう。そうしないと、おばあさんの時のように何も伝えられないままで終わってしまう)

タロウは走りました。懸命に走りました。息が切れて、心臓がはち切れてしまうのではないかとにかくに懸命に走りました。

タロウが畑まで来ると、ひまわりの姿が見えません。

「おーい！俺だ！返事してくれ！ひまわりさん！あの時は悪かったよ！今ならわかるんだ！あの時の笑顔进行ありがとう！俺はようやく笑顔の大切さがわかったんだ！少しだけど、愛情がどれだけ大切かわかったんだ！」

しかし、畑から返事は返ってきませんでした。

タロウがしばらく畑を探すと、そこには枯れたひまわりがいました。

タロウはかけよって、呼びかけます。

「おい！しっかりしろ！ひまわりさん！」

すると、ひまわりは聞き取れないほどの小さな声で、途切れ途切れ最後の力を振り絞って言いました。

「わたしの・・・た、たねを・・・つちに・・・うえて、くださ・・・い。ほほえみを・・・つないでいて・・・ください・・・たのみます。小さかった・・・タロウ・・・」

そうするとひまわりはまったくしゃべらなくなりました。

ひまわりの花が咲いていた真ん中には、種がぎっしりと詰まっていた。

タロウは泣きながらひまわりのほほえみを思い出していました。

「俺はなんてことをしたんだ。俺が、できるんだろうか。この俺が、他の命に微笑むことなんてできるのだろうか。俺が、ほほえみを知らなかった俺がほほえみをつなぐ？」

タロウにはそれ以上考えることはできませんでした。立ち止まって勇気を持ってずに勧めなかったことが、こういうことを引き起こしたのだと思いました。ひまわりにさえも、感謝の気持ちをはっきりと伝えられなかったのです。

タロウはひまわりの種を持って、走りました。

手ごろな場所を見つけると、タロウは穴をひとつひとつ掘りました。

そこへひまわりの種をひとつひとつ植えていきました。

(ひまわりさんの笑顔を、また咲かせるんだ。俺が咲かせてやるんだ)

穴を掘り、種を植えては走り戻り、穴を掘っては種を入れることを何度も何度も繰り返しました。

食べることさえもろくにせず、タロウは一面の平野に種を植えました。

タロウは種を植え終わると、どっと疲れが出ました。もう歩くことさえもできません。

少しずつ冬が近づいてきているのが肌でわかりました。霜が大地に降りています。霜柱が輝いていました。冬の間は街に戻らないと、生きていけそうもありません。

しかし、タロウの気持ちは寒さが近づいてきているというのに、ぽかぽかとあたたかいものがありました。

(もう、眠たいや・・・俺も、おばあさんや、ひまわりさんに、ちゃんとほほえみ返したかったな・・・)



タロウはそのまま目をつむりました。その眠った顔は、とてもほほえみに満ちたものでした。

雪がちらりちらりと降り、タロウの体を白く包み込みました。

一面の銀世界が、タロウの気持ちの輝きを表しているようでした。

やがて春が来て、夏が来ました。

タロウが土に返った場所には一面のひまわりの花園ができていました。

ひまわりの花園はまたたく間に街の人へと知れ渡り、多くの人を訪れるようになりました。

そこへ少女を連れた親子連れが来ました。お父さんは少女を肩車しながら歩いていました。お母さんは少女に微笑んだり、お父さんを幸せそうに見つめたりしてひまわりの花園を歩きます。

肩車された少女が犬を連れて散歩している人に指を指して言いました。

「ねえママ！かわいいわんこだよ！ねえ、うちでも飼おうよ！」

お母さんは少女に答えます。

「ママね、もう犬は飼わないと決めているの。ママね、ずっと後悔していることがあってね、昔犬を捨てちゃったことがあったの。だからそのこと、ずっとね、謝り続けているの。あれから他の犬はね、もう飼いたくないの。わかって」

「ふーん。ママの捨てた犬はなんて言うの？みんなで探そうよ！」

お母さんは悲しげに微笑みながら言います。

「もう、きっと生きていないわ。その犬の名前はね、タロウって言うの・・・」

お父さんは言います。

「タロウはどこかでずっと生き続けているよ。大丈夫だ」

「そうね。タロウはきっと生き続けている」

お母さんは一面のひまわりの花園を見ながら、ほほえんで言いました。ひまわりが太陽の光を浴びて輝いているようにも見えました。お母さんはその姿を見て、まるで自分にほほえみかけてきているように感じ、とても幸せな気持ちになりました。三人はひまわりの花園を見ながら心からほほえみます。

まるで、ひまわりたちのほほえみを返すかのように。